

妹の死

中勘助

青空文庫

今から十八年前の秋、ひとりであの島ごもりをしてたときに私は九州へかたづいてる妹が重体だという思いがけない知らせをうけとった。私は涙をうかめたけれども島を出ようとはしなかった。そのときそんな気もちでいたのである。ところが妹の容態はその後いくらか見なおして床についたままではあつたがつぎの年の夏までもちこたえた。左にかかげる小品はその夏妹が私にあいたがつてるといふことをきいていよいよ望みがなくなつた

彼女を嫁いり先へ見舞ったとき、たぶんその死後間もなくなおまざまざしい記憶と生前枕べでの手控えをたよりに思い出ぐさにもとおもつて書いておいたものである。

来てみたら妹は見るかげもなく痩せていた。前ぶれをしなかつたのでどんなに驚くだろうと思つたが、驚きもし喜びもするはずのところを極度の衰弱のために目にみえるほどの興奮も示し得ずに——かような不随意的な無表情はそののち私も病気で衰弱した

おりに親しく経験したことである——ただひと晩じゆうほとんど眠らなかつた。妹は痩せたために顔がわりがしていた。どちらかといえば細かつた目がぱっちりとして切れがなくなり、おとなしく小さかつた口が一の字にしっかりと結ばれて、笑うと口もとに縦の深い窪みができる。蒼白く弱弱しい皮膚のうえに、それはかつて妹の容貌のうちでいちばん美しいものであつたところの柔くひいた眉がまえよりも濃くのびらかなになつたようにみえる。どこといつてとりたてて目にたつのではないがすべてが尋常に人好きのするほうであつた顔になにかいい意味で技巧のかおりのする彫刻的な美しさがそわっている。——私は後にはからずその似顔を能面の孫次郎に見出した。妹も能が好きだつた。それゆえ彼女

が私のためになんぞ骨の折れることや気のすすまぬことをしてくれたときには「御褒美だ」といつてよく能につれていった。そんなことのために私はこの小品に 孫次郎 という表題をつけようかと思つたこともあつた——私と不意の久しぶりの顔を見あわせから暫くして妹は

「□□さんたいへんふとつたわね」

といった。これが最初の言葉だつたかもしれぬ。挨拶なぞはしていられないほど衰えていたのだ。

どんなところかと思つてきたら妹はほつつりと土堀にかこまれた陰気な家に住んでいた。病室のまえの二坪か三坪の地面にひばが四、五本ならんで、土堀のうえの瓦のすきまにつんば草がから

からにはえている。ときどき色のうすい弁慶蟹が目をうごかしながらじわじわとはいあるく。夕がたになると無数の蜘蛛くもがひばの枝から枝へ、また軒から瓦へといそがしく巣をかける。守宮やもりがでる。そんなものが大嫌いだつた妹は枕にひつたりと頭をつけたなりまるで見えないもののように平気でそれをみている。反対の側のやや広い地面には姿もない木がばらばらと立って、そのなかに赤い実のなる小さな木がまじっている。やっぱり無数の蜘蛛が巣をかける。精しょうりょう 霊しょうりょう とんぼの翅はねが軒端をつたつてひかひかと光る。

妹は

「私そんな島のこときいて泣いたわ」

といった。私が島にこもっていたことを彼女は最初の重体ののち、

一時よほど容態がよくなつたときはじめてきかされたのだ。こういう短いひと言にさえわずかに残つた氣力を一所懸命あつめなければならぬように、そして無駄をしないためにたくさん話のなかから出来るだけ大切なひとつをよりだそうとするように、ながい間をおいてぽつりぽつりと蚊の鳴くような声でいいだすのであつた。

妹には女の子があつた。まだ一つで、這つてあるく。その産すこしまえから床につきどおしなので一度も抱いたことがない。ただ這つてあるくのを頭の位置はそのままに眼の動かせる範囲内だけ眺めてることがある。子供はむかひの釜屋の夫婦が無性むしようにかわいがつてたいがい朝から借りてつて一日じゅう遊ばせている。

狭い人通りのない路^{みち}ゆえ子供のはしやぐ声がよくきこえる。善い人たちらしい。

黒い蜂が蜘蛛をとり^{たくみ}にきて巢からとつてゆく日があつた。また蝙蝠^{こうもり}の飛ぶ夕べがあつた。雨の日も、雷の日も。

井戸ばたへ顔を洗いにゆくと大きなざぼんの木があつて青いのがたくさんなつている。その涼しい木蔭^{こかげ}には金色をしたつがいの逞^{たくま}しい鶏が自分たちの領分みたい^{おまた}にいつもならんでるが、人がゆくと雄のほう^{おまた}が喉をならして羽根のはえた足をのさのさと大股^{おまた}にはこぶ。妹がかたづいてからはじめて上京したときにところの風のかわつてることなど話して笑いながら、盆暮れには家になるざぼんをひとつずつ知るべへくばるのだ といったが、それはこ

のことだったのだ。

ある日妹は

「□□さんきつとああいうところが好きだからいつてごらんさ
い、裏のお濠ほりのふちにたつたひとつ狭い部屋があるから」

といった。それはもと物置だったところへ畳をいれたので今でも
物置なのだが、いろんなものをつめたあいだに人ならばやつと二
人横になれるほどの余地がある。母屋おもやからはずっとはなれて昔の
お城の濠にじかづけにたつてるので、静しずかでもあれば、珍しいも珍
しい。水の幅は一町ばかり、いちめんの蓮のほかには水みづ葵あおいと蒲がま
かなにかごちやごちやに茂つて浮き草が敷きつめたようになつて
いる。風の日には吹きよせられたあとに水があらわれて鮒ふなが鼻を

ならべてるのがみえる。白い蓮の花の咲きみちてるのはこうごうしいものである。蕾つぼみはさきのほうだけほんのりとあかい。陣笠をあおむけたような葉がま夏の日光を湛たえかねてゆらゆらとゆれてゐる。巻葉も美しい。雨の日はもつとよい。雨あしのすきまなくみえるのも、蓑みの笠かさの人などゆくのも。鯉、すっぽん、鰻もたくさんゐる。もとは菱くいや鶴など人をもおそれず群れてたという。私はこの面白い離れが気にいって、たびたびいっていつまでもはいつてるようになった。

妹は昼のうちはどうとうとしてるが夜になると頭が冴えて眠られない。そしてみんながよく寐ねてるのに自分ばかりひとり目をさましてるのが寂しく、また体も苦しいのでひとをおこしてはむずか

もなければそばにいる私にも話しかけない。彼女はあるとき

「吐^{はき}がくるとすぐ□□さんが見にきてくれるから嬉しくて……」

とそれをなかば私に感謝するように、なかば××さん——つれあい——に告げるようにいった。妹がなんにもたべられず、強いてたべる一杯の食事をさえもどしてしまうので、私は吐がくると食べたものが出てしまったか、おりあつてるかと気にかけてのぞいてみるからである。また××さんの留守に私がほかの部屋で仕事をすると

「すまないけれど寂しいからここへきてちょうだいな」

という。私は「銀の匙^{さじ}」の原稿をもつてそばへいつて机にむかう。妹はまじまじと私の顔をみたり、うとうととらくそうに眠ったり

する。彼女がながいわずらいのあいだにあいたいといつたのは母と私だけだそうさ。そうして……

「私こんなにして二、三日うちに死ぬんじゃないかしらん。でももうみんなあいたい人にあつたからいい」

そんなこともいった。そうかとおもえば はやく丈夫になりたい といったり、あんまり苦しくなれば 死んだほうがましだともいう。

「家がまわる。ふわふわして体があるかないかわからない」

そんなときに妹はいちばんいやがる。頭がぼーっとしてしまつて、過去も、現在も、未来も、自分も、自分のねてる位置も、ねてる理由も、なにかもわからず、一瞬間まえのことも夢のよう

に遠くなつて、ただそのようにわからなくなつたということだけがわかるのである。彼女はやくわかりたい、その半死半生の状態からのがれたいとあせつて悶^{もだ}えたり泣いたりする。しかしまったく経験のない私にはその肉体的であるよりはむしろ精神的なものらしい悩みが充分にわからない。

わりあい気分がいい日、私と二人きりのときに妹はこんな話をした。それは去年のことだつた。こちらへきてからはじめて雪がふつた。ひさしく雪をみなかつたもので床^{とこ}についていながら嬉しくて嬉しくて、たべたくてたべたくてしかたがなかつたので、叱られるのをやつと頼んで松の葉につもつたのをとつてもらつたべた。妹はそれを話すときに思ひだしても嬉しいらしく子供みた

いいいそいそとした顔をした。彼女は　でもすぐとけてしまった
と　いった。

病気があまりながびくので妹は自分でも入院してみようかとい
う気になり、皆もすすめていよいよそうときまった。家を出ると
きに

「こんだ退院するときは玄関まで歩いてこられるかしらん」
なぞと　いった。もうじき死ぬのだということをや××さんからきい
て自分一人だけ知ってた私はそんなことをいわれるのがつらかつ
た。私は病室までつきそっていった。帰るとき妹は

「毎日きてちようだいよ」
と　いった。

私は毎日病院へ行ってなにをするでもなく寝台のそばに腰をかけている。そのあいだにさきで気がむいたときひと言かふた言話をする。入院のときの運動がさわつたとみえて容態がいつそう悪くなり、頭が毎日のようにぼんやりして心細がる。妹は自分がどういう位置におかれてるのかも、蒲団ふとんや寝台のあるなしさえもわからない。そうして食事のときにもいつものとおりの体の位置でいつものとおりに食器を出されないと箸のとりかたもわからずに食器を見つめて考えている。そんな風なのでひとしお寂しがつて私がゆくと

「寂しいからそばへよって手をもつてちょうだい」
ということがよくある。そんなとき私は一日手をとって顔をなが

めている。……妹は

「よつぽど胃が悪いのね」

といった。もうじき死ぬというほど衰弱してるのだとも知らないで、彼女は胸のへんにひどい衰弱や、血液の不純になった場合の面白くない徴候とされる無数の皮下出血をおこしている。

死ぬ二日ばかりまえのことだった。……私にすぐきてほしいというのでいってみたら誰もいないでひとりつきりぽつねんとねていた。

「どうした」

といてそばへよつたら

「寂しいから手を握って」

といって手をだした。その前日だったか 入院してからはじめて頭がはつきりしてなんでもよくわかる といって非常に喜んでたが、この日も気分がいいといつていつになく話などした。ぼんやりすると死にたがるのがはつきりすればやっぱりよくなりたがるのを自分でもおかしいといつて笑った。妹は……ぐちをこぼした。それから もうすこしうへ体をあげて というのでそうつと抱えてずれた枕のほうへ押しあげようとしたらすこし強くゆれたためにせつかく冴えてた頭がまた朦朧としてしまった。けれども彼女はちよつと笑顔をみせて、はじめに私にそんな世話をしてもらうのが嬉しいようなきまりが悪いような様子をした。それがあとにも先にも私が手をくだして世話をしてやったたった一度である。

枕もとには見舞にもらった西洋水仙の鉢植えがおいてあったが、あれほど花が好きだった妹ももうそれをみようともしなかった。私を買ってきて壁にとめた版画にもただきれいだことと氣のないひと言をくわえただけだった。窓のまえにはポプラきょうと夾ちくとう竹桃の若木があつて幾羽かの鳩がよく餌をひろつていた。天神様からきたのだろう。

たしかこのことであつた翌翌日の朝だった。病院から急の迎いがきたのでとりあえずいった。××さんは海峡をこえて往診に出た留守だった。いつもおいてゆかれるのをいやがつてひきとめるのがその日は 気分がいいから といつて承知したのだそうだ。で、つきそいの者だけしかいなかった。妹は唇の色もなくなつて

いた。私と母の顔をみて

「苦しい。唇をしめして」

と虫のようにいった。起きあがって坐ってるうちにうつぶせに倒れて脈が非常に悪くなったのをようやく注射でとりとめたのだという。私は 予期した時がきたな と思った。注射のためにちよつと氣力をとりかえしたとき妹は

「私もう今日はごはんたべない」

といった。いつも叱られて強いて食事をさせられるのだ。義理の父母も釜屋のかみさんもきた。乳母は子供を抱いてきた。妹は涙ぐんであわててる人たちを平気に見まわしていた。そして自分の背中のほうに子供を抱いて立ってる乳母に

「こつちへこなければ見えやしない」

といった。釜屋のかみさんが乳母の手から子供をうけとつてみせた。妹はただひと目みたばかりで平気な顔をしていた。彼女は苦しくなるとうわことみたいにいるんなことをいったがそれは決してうわことではなかった。いつのまにか目をとじてしまつていながら先生のいるいないをよくききわけて

「頭ばかりはつきりしてなんにもわかりませんからもう……」
といった。また訴えるように義理の母を呼んで

「お母様苦しい」

といった。妹はしんからその母に頼っていた。お母様は涙をこぼして

「ああ ああ もうじきらくになるけんの」

といつて背中をさすった。妹は目をとじたまままでそのせつない、頼りない、奇怪な悩みをどうぞして皆にわからせてはやくどうかしてもらいたいというように苦しいなかに言葉に力をいれてくりかえしくりかえしこんなことをいった。

「いくら息をしようと思ってもできなくなってしまう。どうしたらいいんでしょう。ほら、いくらしようと思っても……」

そういううちにも幾度も息がとまりかける、一所懸命力をいれて吸いこもうとするのだが。

「誰か教えてくださらないかしらん。どうしても息ができなくなってしまう」

しまいにはうかされたように

「誰か息をこしらえてちょうだい」

といった。また

「なにかいってはずぐ忘れてしまうから始終氷を口へいれてて、そのあいだけわかるから」

ともいった。いつもながらこういう場合ほど我我の無能がよくあらわれることはない。私たちは死神にいいように料理されてる病人をとりまいてしんから手もち不沙汰ぶさたに控えている。私は自分をはじめ人たちを見まわして思わずふきだしそうになった。私は立つて窓のそばへいって外を眺めていた。ちようど夕だちがあがつて雲の塊がふわふわと飛んでいった。やがて暑い日になって強い

風がおさまった。

そんなにしてなんべんも息がとまりかかると注射でとりとめとりとめ三時ごろにもなったが××さんは帰ってこなかった。しまいには病院の入口から病室まであきあきするほど長い廊下のところどころに人が立って××さんの姿がみえると同時に出来るだけはやく病室へしらせる手筈てはずになった。そこへやつとのことで××さんが帰ってきた。私は気がらくになった。あとはただもう死ぬだけのことだ。××さんが帰ったときには目はあかなかつた。××さんが手をとって

「わかるか」

といったらうなずいて

「声でわかる」

といった。——誰か泣いた——注射などしてらうちに不意にぱつちりと目をあいた。そして皆の顔なぞを見まわしてにこにこしながら

「またわかるようになった」

といった。妹はそのときからもうちつとも肉体的の苦痛を感じなかつた。——モヒの注射をしたのではなかつたかと今思う——顔に血のけも出てきた。そして××さんに手をとられてなにか問われるままにいつもの苦痛のないときのとおりに話していた。しかしごく緩慢な周期をもつて意識の明瞭なときと不明瞭なときが交互にくるのを自分でも気がついてる様子だった。その意識の不明

瞭なときには脈も呼吸も変調を呈してるのだった。明暗の周期が次第に速くなつて一歩一歩最後に近づいてきた。私もちよいと手をとつてみたがいつのまにか先が蒼白に冷たくなつていた。とうとう妹はなにかいつてるうちに あ あー と息をひいて五、六秒のあいだ呼吸がとまってたが、見てるうちにちようどうなされた者が目をさますときのようにはつと目をあいて あー と溜息をし、また息をふきかえして私たちの顔をみてさも嬉しそうになつこり笑つた。

「どうした。嬉しいか」

××さんがいったら軽くうなずいて

「またわかつてきた」

といった。私は いよいよ死んだ と思ったのが生きかえったの
で不思議な気もちがした。妹は泣いてる母や皆の顔をきよとんと
して見まわしていた。××さんと話してるあいだにときどきじつ
と私のところに瞳がとまることがあった。眼の色がうすくなつて
きた。私は まだ見えるかしら とおもつてすこしそばへよつて
「みえるか」

といったらかすかにほほえんですこしうなずいた。私はこのいい
ようなない静な不思議な様子をよく見ようと思つて、寝台にかた
^{ひじ}肱をつきながら刻刻弱つてゆく彼女を仔細しさいに観察して要所要所を
手帳にかきとめた。妹は絶えず脈をとつてる××さんと話してる
うちしまいに

「もうあなたと話すのもこれぎりかもしれないよ、すぐわからなくなるんですもの。ほら……」

そういつてこつりと息をとめて眼をとじてしまった。××さんは待ちかまえていて注射をする。一言もものをいう者がいない。静である。そこには××さんと私と二人の母のほか誰もいなかった。眼をとじた顔を見つめて待つてるとやがて息をふきかえず。いよいよ頼みずくなになってきたので××さんが

「なにかいいのこすことはないか」

といったらわずかに笑みをうかめてうなずいた。もう死ぬのはなんともなかったのかもしれない。よくいったように死にたかったのかもしれない。××さんは床に顔をおしつけてたまらなそうに

泣いた。……妹の瞳孔は散大してなにも見えないらしかったがその眼もとうとうつぶってしまった。それでもなにかいうらしく唇をうごかして自分の顔のまえにかきさぐるような手つきをした。が、間もなく息をひきとった。最後の息というものはいくたび見ても最後らしく、そしてよそ目にはせつなそうなるものである。皆はまわりによつて泣いた。私はそういう場合の私の習慣？ にしたがつて涙はひとつもこぼさなかつた。そうして彼女の死のためにはひとに忘れられてからからになつてゐる西洋海^{かいどう}棠に水をかけてやった。鳩がいつものとおり餌をひろいにきていた。晴れて暑い夕べであつた。名物の夕なぎがはじまつてポプラーも夾竹桃も細工物のように静にたつていた。

屍した体を家にはこんで座敷にねせておく。こうなると私はいつも奇異な気もちに襲われる。この陶すえもの物の人形よこたみたい横よこたわつてるものをみて　これはいつたいなんだろう　と思う。釜屋おやしの親仁おやしさんは子供をつれてきて

「これみいさいや。お母様はなんまみ様にならつしやつたが」という。子供はけろりとして眺めている。

みんなそれぞれの用事にまぎれてるので屍体が床のまえにおきはなされている。で、寂しがつて私をよんだことなど思いだしてそばに坐っている。

翌日入棺。土地の習いでみんなして南無阿弥陀仏を紙にかいていれてやる。釜屋の親仁さんは

「私もいれさせていただきましようわい」

といつて書いていれる。身うちの者だけは手足の爪をきつて紙に包んでいれる。平生癩かんしょう性に爪をきる私にはとろうにも爪がない。で、申訳ばかりけずつていれる。蒼白く硬直して窮屈な棺のなかに合掌してる死骸をふとみればやつぱり妹のような気もする。この手は昨日まで 寂しいから といつて私にさしだしたそれにちがいない。夜、火葬場へゆく。

あくる朝はやく××さんと壺をもつて骨をひろいにゆく。隠おんぼ

坊うが目塗めぬりの土をばらばらとはぎおとして鉄の扉をあける。鉄板

のうえに砕けた骨が灰にまぎつてるのを荒神こうじんぼうき箒ほうきに長い柄をつけたようなものでかきだして扱えりわける。焼き場もりの男は窯かまの

後ろの口へまわって

「これだけむこうに落ちとりましたで」

と頭蓋骨のつきめからはなれたのを二、三枚拾ってきた。私たちは灰のなかから、これが肋骨、これが椎骨、大腿骨、なぞとひとつひとついじってみては壺にいれる。大きなのはからりと、小さなのはちりちりと音がする。骨のなかに黒ずんだのがあるのを焼き場もりの男は

「脂などがあるとどうしてもこうなります」

といつてつまみだしてみせる。そばで隠坊が骨の粉をふるいはじめたので灰かぐらももうもうとたつ。私たちはしばらく外へ出る。海には——火葬場は海岸にあった——玄海島、のこの島、鹿の島

などというのがみえる。沖のほうに海の中道ななみちといって長くなが
くつきでた砂洲がある。舟がすきな妹はそこへゆきたがつてたの
でいつかつれてゆくはずだったのだそうだ。ふるいわけられたな
かからまたいくつかの齒をひろいだす。壺が小さくてはいりきら
ないのを焼き場もりの男が上からおしつけて骨をみじやくので大
きなのととりかえる。

つぎの朝庭の赤い実のなる木に蟬のぬけ殻があつたのをよくみ
ればそばにぬけたばかりのみんながじっと休んでいた。どこも
かしこもまだみずみずしくうすい色をして、翅はねなど白珊瑚と翡翠ひすい
の骨組に水晶をのべてはつたようなのが露にぬれてしつとりとし
ている。……

夜。葬式。寺の墓地は広くて大鳥毛みたいな形をした銀杏いちようの
大木が五、六本まつ黒にならんでいた。妹の墓は実をもつたはぜ
の木のあいだにたてられた。

妹は二十三だった。面影は十七年ものながいあいだいいつも昨
日のように鮮あざやかにのこつて、そのままに私が年をとるだけ若く
子供らしくなつていった。その面影を目に浮べながら私は筆
をとつた。そうしてこの小品を書きおえるまでにくたびも
筆をおいてもすれば溢あふれそうになる涙をとめなければなら
なかつた。私は今にして自分がいかに深く彼女を愛してたか
を知つた。

明治四十五年夏
昭和三年

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆99 哀」作品社

1991（平成3）年1月25日第1刷発行

底本の親本：「中勘助随筆集」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年6月

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそって、あらためました。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

妹の死

中勘助

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>